

浄土

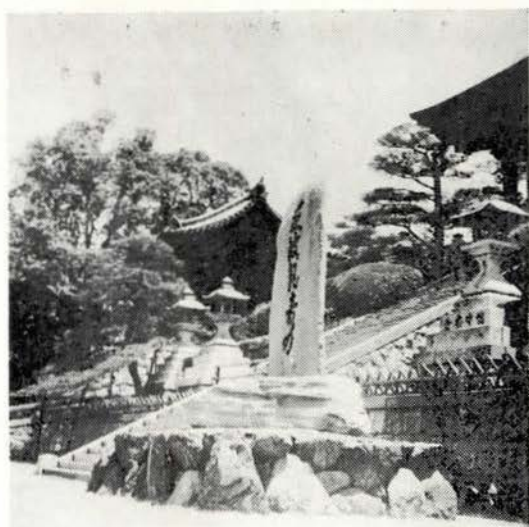
昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 逓達省 (特別授受承認誌) 第三五二号
昭和四十七年八月二十五日印刷 昭和四十七年九月一日発行



第三十八卷

第九号

1972
9



— 目 次 —

表紙 「増上寺五百羅漢図」松涛達文画

仏性に目ざめよう……………	光 山 明 道…………	(2)
月の歌……………	竹 中 信 常…………	(4)
私の「恩人」……………	須藤隆仙・山内雅人…………	(8)
● 聖典解説⑤ 善導大師の発願文〈続〉……………	小 沢 勇 貫…………	(12)
六時礼讃無常偈(中)……………	佐 藤 成 順…………	(15)
かの秋の日の丘……………	平 井 隆 一…………	(19)
ハイという返事……………	山 本 竜 二…………	(22)
異僧真覚〈第九回〉……………	柴 田 六五郎…………	(24)
仏教の手びき ④ 日本仏教の宗派について……………		(28)
「道」四天王寺への道……………	高 橋 良 和…………	(30)
浄土宗列祖の墨蹟をたずねて……………		(32)

念声和語



蟻地獄からの脱出

—彼岸への道—

新幹線ができて田舎から東京に通うのが随分楽になった。昔は東京へ泊るか夜汽車で朝帰りするかした遅い時間でも楽に帰寺できるようになった。ところが新幹線で気がついたことが一つある。それは昔の東海道線時代では汽車が停ってから席を立つのが普通だったのに、停車駅が近づくとか大分手前から多くの人が逸早く出口に殺到する。私の降りる静岡駅は「ひかり号」通過のため停車時間が長いのに誰しもが急いで席を立つのである。

それは正しく現代病の現われなのだろう。空にはジャンボ・ジェット機、地にはカミナリ族が跳梁するスピード時代、誰も彼もが追っ駆けっこの生活をしている。欲望と利潤追求の時代と呼ばれる所以である。せかせか毎日気ぜわしく動き廻っている。寸刻も惜しい。そんな気持が彼らを新幹線の降り口にとかり立てるのである。

しかし、それでよいのだろうか。

欲望充足のために日々をすりへらしている生き方。自分さえよければ、自分らの生活さえよければ、人はどうなるとこうなると。これが個人と集団と階級とを問わず一様に現代人が陥っている蟻地獄の様相である。生活の充足を求めながら常に欲求不満にもがいているのが、現代の病相なのである。暗い日曜日やヒッピーや蒸発や麻薬やバチンコやセックスが氾濫するのも、実はこのような病相の裏返しといえよう。

急がねばならぬのは、むしろ彼岸への道であって、この世の欲望を追い廻す煩惱の虜囚たることではなからう。荒涼とした生活の戦場から、貴い生命の広場へと、わが身を変身させねばならない。それは外への眼を閉じてわが内なるもの、真実の自己の生命へと深く省ることによってのみ果すことができよう。与えられたる己れが一回限りの生命、これを空しく蟻地獄にもがかせてよいのだろうか。現代からの脱皮こそ現代の課題なのである。



仏性に目ざめよう

大本山増上寺執事長 光山明道

秋風を肌身に感じては、かれんな秋の七草と菊の花を思う、本節の花は、その色彩と芳香と形体がすばらしい。

春に芽を出した松や杉の苗も、すくすくと延び育ち、天地の恵みを、しみじみと有難くうけとって自然に感謝の合掌する。

経済大国日本も多難な年である。連合赤軍という過激グループの彼等の同志十四人のぎやく殺と浅間山荘事件、ついで中近東イスライル国テルアビブ空港で、その亜流という奥平、安田、岡本等三名による大ぎやく殺事件、空港に降り立ちやれやれと笑顔の子供婦人やブイルトルコの巡礼者に対するさん殺傷事件は、なんとも申訳もない。国内では刑法

事犯が増加し、社会不安が暗雲のように拡っていることは誠に残念なことです。

彼らに仏教の因果応報や勸善懲惡の思想を、少しでも早く知らせいたならば、又は仏さまを拝むことを教え得たならば、所謂革命ごっこは、未然に防げ得られたかも知れないと思う。文化生活は電化ばかりの生活ではなく、相互信頼の上の扶け合いの人間性に目覚めてこそ、そこに有難さと尊さがある。

どなたさまも、人間として生をうけたからには、社会生活の基盤である仏教の五戒を生活のルールとしなければならないことは今更いうまでもない。

聖徳太子は奈良時代すでに五戒を国分寺と

同尼寺に於て、市民と実践修行し、信仰文化生活の憲法として教えられたのです。現代も五戒が実行されるなれば、明るく、住みよい社会、よき人生の果実となり、生活に笑いがたえない筈であります。

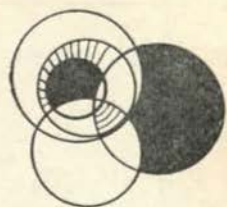
悉有仏性というみ教は、人々には、だれにも生れながらにして、仏性があることを示されている。そうして阿弥陀如来の光明は、いつも我々を照し「仏性に目ざめよ」と救いのみ手を差しのべていて下さる。

仏性とは良心の声であり生れながらの本性である。寺院等に於て行われる仏教行事のある度毎に、仏性に目ざめよと教え下されている。法然上人は、ひたすらに念仏せよと教え下さる。我々が合掌して一心に南無阿弥陀仏と唱える時には、心の乱れやいろいろの妄念や慾心が、積れる雪のように自然に消えて、仏性に気付く訳です。

仏性に答える方法はいろいろとある。その答を引き出すことは、仏教徒の使命ではなからうか。

この点に立って、私は先づ幼児教育の盛行を期したい。昔から三つ子の魂百までといい、初心忘るべからずと古語は教えている。幼児のおいでの方々の御協力をお願いしたい。次に伝道です。文書伝道あり、弁論の伝道あり、法要方式や同行念仏等の伝道がある。近頃はレジャーブームで参拝旅行もある。いづれも仏性に気付いて下さるよき企画であります。仏性のめざめは又念仏を唱える感謝の姿ともなり、人生開頭、生き甲斐を汲みとる歓喜の生活ともなっています。

我が浄土宗は、明後年で浄土宗開宗八百年のよき年を迎える。この記念すべき佳辰を永遠に生かすことは、浄土宗一万ヶ寺の住職や同信の方々が、寺院の護持に当り、宗定の各種行事と法要を檀信協力のもとに実行し、念仏こそ阿弥陀如来のお姿なりと合掌念仏して行きたいものです。特に法然上人を讃仰しては、念仏の有難さと尊さを自信教し伝道したいものです。念仏の声あるところに、真の人生と生き甲斐があります。



—
春は花、夏ほととぎす、秋の月
冬の雪さへ涼しかりけり

道元禪師がこう詠まれているように、長い暑い夏をくぐりぬけて、どうやら朝夕、涼風の見舞うこの頃、歳時記や季寄を開けば、待宵とか、星月夜とか、月見とか、名月とかといった文字が目につく季節となった。

公害だの、スモッグだの、濁った都会の空では望むべくもないが、山の端から中天にかけて、おおどかに移行行く丸い月の姿は、幼い頃の夢を秘めて、いまま人々の胸の中に輝いている。

少しくふりかえてみると、仏教と月との縁は浅からざる

月の歌

ものがある。仏教では「真如の月」などといって、澄み切った月の姿をさとの境地のあらわれとし、月愛三昧（ガツアイサンマイ）では月光はよく人の苦悩を除き、心をなぐさめるといわれている。真言宗では月輪観（ガツリンカン）といって「わが心すなわち月輪の如し」と心中に思い、さとりに至る修法としている。月はさとり、闇はまよい。これが仏教での考え方。してみると、秋の夜長に、涼風に吹かれながら、ビルの谷間から月を眺めることも、そのまま仏道の修行に通ずるといえないではないであろう。

そこで、目に触れるままに、仏教と月とを詠んだ歌を少しく集めてみる。

わしの山、つねにすむてふ嶺の月

竹 中 信 常

かりにあらわれ、かりに隠れて

元 政 上 人

深き御法の心とはしる

隆 衡

さとりえし、心の月のあらはれて、

わしの高根にすむぞありける

西 行 法 師

うき草の、生ふる渚に月かげの
ありとは、ここに 誰か知るらむ

良 寛

「わしの山」とはいうまでもなく釈尊がつねにそこにいて
法華経を説法された靈鷲山のことである。

みほとけの教えを月に托して詠んだものに、

雲よりも、高き所に出でてみよ

何とて月に隔てやはある

夢 窓 国 師

限もなき、月をうつして、すむ水の

色も空にぞ、かはらざりけり

瞻 西 上 人

良寛和尚より六百年も前に、法然上人は同様のことを説かれていたのである。み仏の教えは、たとえ道端の小さい水たまりにでも、月の影が宿るように、どこにでもゆきわたっているのである。水面に生えた葦が邪魔して、心ない人にはそれと分らぬが、よくよく思索するならば、月のように涼やかな心が、人の胸の中に宿っているものなのである。

胸のうちの、くもらぬ月をうつしてぞ、

月を眺めていると、眺める自分の心まで、すがすがしい気

分になつてくる。月を心の糧として詠んだ歌がいくつかある。

身に結ぶ、水にやどれる月影の

あるか、なきかの世にこそありけり

紀 貫之

心から、心の月のすみかねて

いく夜のやみに、まよひきつらん

法 印 宗 尋

くもりゆく、人の心のすへの世を

むかしのままに、てらす月かけ

円 空 上人

公害の現代に、一しお身にしむ歌である。

にこりある、水にも月は宿るぞと、

おもへばやがて、すむ心かな

願 蓮 法師

軒くちて、くづれかかりし賤が屋も
一つにてらす、秋の夜の月

読 人 不 知

なおからぬ、心をかくす我かげに

いとはで照らす、月ぞはづかし

太 田 道 灌

道もなく、忘れはてたる故郷に

月はたづねて、なおぞすみける

通 生 法 印

月は洩れ、雨は漏るなと思へども

賤が伏屋を、葺ぞわづらふ

西 行 法 師

二

法然上人は月に縁がおありになった。終生変らず上人をお守りし、物心両面にわたって外護につくした、さきの関白藤原兼実公は、その住いが九条月の輪にあるところから、月輪殿と呼ばれ、法然上人もしばしば月輪殿に歩を運ばれたので

ある。葦間の月の法話も、上人みづから好まれて、しばしば

弟子たちにくりかえされたそうである。

浄土の教えを月に因んで詠んだ歌には、

西へ行く、月をやよそに思ふらん

心にいらぬ、人のためには

西行法師

弥陀たのむ、人は雨夜の月なれや

雲はれねども、西にこそゆけ

玉葉集

阿弥陀仏と 唱ふる声に夢さめて

西へかたふく 月をこそみれ

選子内親王

などがある。

しかし、何といっても、月の歌で一番すぐれているのは

月影の、いたらぬ里は、なけれども

ながむる人の、ここにぞすむ

法然上人

である。これは浄土の教えをもっとも端的に、しかも、その中に深く、広い意味を持ったものとして、「浄土宗歌」として、ひろく歌われている。

これには、二つの大きい意味がこめられている。一つは、月を阿弥陀仏とし、月光を弥陀の大慈悲にたとえる。月光は天上から、いささかの偏差もなしに、平等に下界を照らす。時に雲が出て、それをさえぎることもある。また、世事俗事に追われて、月光を仰ぎみることを忘れているものもある。したがって、月の光は、これをすなおにうけとって、その心にいささかの曇りのないものの心の中に澄み輝くのである。

浄土宗の教えは、三つの心——まごころと深く信ずる心と極楽に生れようとねがう心とを抱くことが大切であるという。この心がなければ、どのように美しく澄んだ月の光も、人の心の中にまではさし込んで来ないのである。

窓をあけて、たとえスモッグで霞んでいても、わが心をさえ澄明にして眺めるならば、秋の夜の月は、心の奥の奥まで、すがすがしく照らしてくれるだろう。



私の「恩人」

須藤隆仙

(函館市称名寺住職)

恩人と申しますと、数えきれないほどおられますが、お仏飯を頂いておる私といましては、やはり仏縁をいただかして下された菩提寺の和尚様と、仏僧子となって以来、育て下された故師僧とが、恩人中の大人でられます。

私の生家は函館市在上磯町というまちで、食品店を営む家でありました。須藤という姓は青森県の西津軽郡に多いそうで、私の実家も、もとはその出であり、曾祖父の代に北海道へ渡ったのですが、津軽地方はなかなか浄土念仏の盛んなところで、それで私の実家も代々浄土宗でありました。

上磯町というところは、あまり大きくない町でしたのに、浄土宗の寺が三つあり、ここへ移住してからは、そのなかの禅林寺というお寺の檀家になりました。禅林とはいってもレッキとして浄土宗の寺でした。私の少年時代に、そのお寺に吉元在心というご老僧がおられました。たいへん立派なお方で、子供心に「うちのお寺の和尚さんは、この町内のどこの寺の和尚さんよりも立派だ、一ばん偉いのだ」と感じたものでした。それに母が常日頃、「お和尚さんにお会いしたら、必ず帽子をとってお辞儀をするように」といったものですから、どこで会っても必ずお辞儀をしたものでした。

ところが、たまたまある日、このご老僧がわざわざ家にお出になられ、「あなたのところの次男坊をお寺に上げなさい」といわれたのでした。

これには全く驚きました。しかし、とにかく立派なお坊さんのおすすめでありましたので、親子共よろこんでおうけし、函館市の称名寺の、小川隆誠ご住職のもとに弟子入りさ

して頂いたのです。

小川上人は、またまた立派なお方であられました。当時のこととて、小僧とご住職とでは食膳も違っておりまして。朝食だけは皆いっしょにお茶漬けにタクワンだけという粗末な食事でしたが、夜は師僧の食膳はいろいろのご馳走でかざられておりました。すると師僧は、「この子は体が弱いから」といって、必ず膳のご馳走の中から、一ばんおいしいようなものをとって、私に与えてくれるのでした。奥さんが、そういうことでは修行にならないから、と止められるのもきかず、師僧は必ずそのようにして下されたものでした。大正大学に入ってから、時折、師僧は宗務所や増上寺へお出になることがありましたが、その時は前もって葉書を下され、指定の場所に私が行くと、「酒をあまり飲むではないぜ」といって、たくさんの小遣いをくれたものでした。

私はこの両上人のお蔭で、衣を着る生活がかなえられておるのです。有難いことで、そのご恩はとても筆舌に尽しきれません。

恩 無 限 大

山 内 雅 人

(NHK東京放送劇団)

父の故郷四国に駄洒落の好きな伯父がいた。父の兄である。小学校二、三年頃の私はこの伯父としばしば会う機会があり、彼一流の駄洒落で笑わせられながらいろいろ教えられるものだ。例えばこんな調子で――。

酒を愛した伯父は、嬉しそうに、そして実にうまさうに飲むのだが、その雰囲気の良い、子供心にも何かほのぼのとしたものを感じたものである。

『そんなにおいしいの?』と聞く私は、

『あゝ、うまい!! お前もおおけなったら飲まにや、そして、酒の持つ、良さ、うまさ、またその悪さも、自分で試してわきまえにやいかん。これはサケられことじゃ、しやあけにサケ、ちゅうんでの……。』

この伯父が、或る時、こんなことを云った。『男は、他人様から受けた恩を忘れたらあかんで、おなごは、まあ、かまへんありやメンじや。けど、おとこはきちんとせな。しやあけに雄をオンちゅうんじやけんの。』

愉快なこの伯父も、他界して十年になる。健在ならば七十九歳、一層枯れた駄洒落で笑わせてくれたに違いない。私にとつて、生きていくことの楽しさを教えてくれた最初の師であつたと云える。

さて、所謂芸能界に首を突込んでから私も二十年。学生演劇で夢中になつて飛び歩いていた頃から振り返れば、三十年の月日が、早や、消え去つてしまつてゐる。その割にはうだつの上らぬ役者だが、しかし、どんな苦勞も厭わぬと、好きで飛び込んだこの道で、妻も娶ることが出来、子供も二人、老いた両親も抱えて、無事息災に今日を送れるとは何という幸せ、と思いつつ、營々として嬉々として、一つ一つの仕事に取り組んでゐる毎日である。身体は小粒、容貌平易、歌も唄えずトンボも切れず、楽器も駄目だし覚えも悪い……こんな私が、とに角歩き続けて来られたのは、直接に、或いは間接に、それこそ、全く大勢の方々の力に頼ることが出来たお蔭である。どんな仕事でも、多くの人の力に支えられて可能となるのであろうが、総合芸術、共同芸術の完成を目指す

す私達の作業では、特に、数え切れぬ程多くの人々の協調があつて、やつと、その創作を披露出来るわけだし、観て下さるお客様あつて、始めて成り立つ仕事。相互に享受する恩が大きければ大きい程、作品の成長も大きいと云えるだろう。

そして、この共同作業の一部を担う役者に課せられる役割は、いかなる作品をも具象化出来るよう、あらゆるキャラクターを研究体得しておくことである。つまり、善も悪も、世に起る一切合切、すべての人物が私の手本……森羅万象これすべて恩師という次第で、その恩、無限大!! と云うことは、恩師に取り囲まれて生きてゐるようなもので、素晴らしいと同時に、厳しい道に入り込んだ訳だ。この無限の恩に報いるには、感謝の心と日々の努力によつて、うまい役者と云われずとも、良い役者だったと云われるよう、ただひたすら歩むのみと思つてゐる私である。

この道に入つた動機を尋ねられることがあるが、その都度、私の頭には小学校で四年間担任であつた、松尾弥太郎先生の顔が浮ぶ。国語の時間に於ける先生の朗読の美事さが、私の心の深い所へ、今日の小樹の元となるタネを落してくれたのだと信じてゐるからだ。先生のようになろうと、一生懸命声を出して片端しから本を読んだものだ。そして、学芸会ではいつも主役を貰い、大張り切り……。そんな私を先生

は、自分の少年時代を見ると、父母に話したそうである。そして、母方に医者が多かったので、私を慶応から医科へ進学させようと考えていた両親を説得して、御自分の出身校である芝中学へ入学させてくれた。行く末、先生と同じ教師の道を私に開かせようと考えられたのかも知れない。

両親も、本人にその気が起れば、芝中から慈恵医大へのコースがあると慶応をあきらめた。しかし、吾が心のタネ、芝での自由な校風の中ですっかり養われ、卒業する頃には完全に芽を出し、早稲田大学に入るや直ちに学内に、自由舞台という劇団を創り上げたものである。両親の落胆振りは烈しかったが、私は幸せであつた。それがほぼ三十年に近い前という訳だ。

松尾先生は現在、全国学校図書館協議会事務局長の要職にあつて活躍しておられ、時折、私の仕事を見て励ましのお手紙を頂だいでいる。今日、無限の恩師に囲まれている幸せのタネを与えて下さった先生こそ、私の生涯の恩師といえよう。

表紙の解説

大本山増上寺（五百羅漢図百幅）

今回は開宗八百年記念として大殿の新築工事が急ピッチで進められている増上寺である。明徳四年、浄土宗第八祖西譽聖聰上人が、武蔵国貝塚に創建したのが始まりで、正しくは三縁山広度院増上寺という。天正十八年徳川家康が江戸入城にあたって菩提寺とし、慶長三年寺領二十万坪をよせ、寺基を現在地へ移してからの隆盛はすでに知られるところである。ここに紹介した絵は、徳川末期狩野一信の筆による、『五百羅漢図百幅』の中、目連連のところである。五百羅漢像は、仏教の史伝・思想などがとらえた素材を背景に、五百人の積尊の高弟を描いたものであるが、同寺のは、一幅に五人ずつ描かれており、全部で百幅となり、表記の題ができたものである。現在同寺は、大野法道台下的もと、今回ご執筆いただいた光山明道執事長を中心に、大殿の新築をはじめ、境内の整備が進められており、昭和四十九年の開宗八百年には、その面目を一新し、念仏弘通の根本道場として、人々の憩いの場として、更に発展することであろう。



善導大師の發願文(続)

小沢 勇 貫

(大正大学名誉教授)

往生と現証

この願文の前半は往相の願いであって、臨終正念に、阿弥陀さまと菩薩聖衆の来迎をいただいて、安らかな往生をねがうにあり、それもみ仏の本願の強大なさえがあつてのことである。真宗では臨終に来迎を期待することを必要としないとし、他力では不来迎とまで説くが、理論はともかく経文にあることは素直に受けとりた。古来の念仏の大徳や妙好人の伝を見ると、その現証ともいふべきものが少くない。ここでは特に大師のおしえを伝えて、日本で浄土宗を開かれた法然上人のご臨終の模様を、伝記史料によって挙げておきたい。

上人は晩年七十五歳で配流の難に遭い、幾多の圧迫も重っ

た中で、老齡の御身には余程応えたことであろうが、赦免帰洛の翌年、建暦二年(一二二二)正月八十歳を以て往生のご本懷を遂げられた。常隨の弟子勢観房の見聞記録をもとに作られたという醍醐本『法然上人伝記』の中に「御臨終日記」の一編がある。これには病状から最後臨終までの御ありさまが、日をおつて時刻までくわしく記されている。

「建暦二年正月二日、日来の不食殊に増し、二三年前から耳目が衰えられたが、「死期已に近づいて昔の如く耳目分明なり」と書かれてあつて、意識が明了になり、また往生の事を談じ、高声念仏されて絶え間がなかった。

「正月三日戌時」(午後八時)法談の中で、弟子がこのたびは極楽往生したもうかと問うたのに対し、「我れはもと極楽

に在りし身なれば然るべし」と、当然本国へ帰るのだと答へられた。

「正月十一日辰時」（午前八時）高声念仏せられ、法談の中でも高声念仏すれば阿弥陀仏が来給うと語られ、観音勢至もろもろの聖衆が現前されているが、拜することができるとか弟子達に問われ、弟子達が見たてまつらずというと、いよいよ念仏せよと勧められた。また病床に安置された本尊を拝されるよう申し上げると、上人は指で空を指しこの外にまた仏まします。この十余年来極楽浄土のありさまや、仏菩薩の姿を拜することが常であつたと答へられた。

「正月二十日巳時」（午前十時）坊舎の上に紫雲がたなびき、その中に円形の雲が色あざやかで、画像に見るような仏を道行く人たちが見たという。二十三日、二十四日も、紫雲大いにたなびき、上人の高声念仏絶えず、弟子五六人がかわるがわる助音した。

「同二十五日午時」（正午）念仏のお声が弱まり、時々高声念仏され、かような中に慈覚大師から相伝の九条の袈裟をかけ、光明偏照の経文を唱えて眠るがごとく命終された。

別の『法然上人伝記』（九卷伝）等によれば正月二十三日、勢観房の懇請にまかせて、一宗の要義を簡明に一紙に書いて与えられた（一枚起請文）。

以上のような上人ご臨終の様子は、もつとも信憑すべき史料に出、他のいずれの伝記にも見えている。ご命終が近ずいて意識がはっきりされたこと、高声念仏して阿弥陀さまの来迎を感じられたことなど、めでたき往生の現証として注意をひくところである。また浄土への往生を、上人はふるさとへ還ることとされ、本国へ帰る安らかさが伺える。この事も上人の信仰体験として重視しなくてはならない。

還相の願いをこめて

「かの国に到りおわって、六神通を得て十方界にかえりて、苦の衆生を救摂せん」とあるのは、まさしく還相のねがいである。浄土門で信心のもち方について、至誠心（まことの心）、深心（深く信ずる心）、回向発願心（えこうはつがんしん）の三つの心をあげる中、第三の心では、過去世から今生に修したあらゆる善根をすべて浄土往生に手向けること、浄土に往生した後、大悲心をおこしてこの世界にかえって苦悩の衆生を救いたいと願うこと、この両面が説かれる。自分一人だけの往生ではなく、利他大悲の心をおこして多くの人がとをも救い、また多くの人びとともども往生を願う。ここに大乘の精神が見られるのである。信心の深まりにおいてもそうなければならない。

また法然上人がご往生を本国浄土への還帰とされているこ

とから、私たちには上人一代の化益がとりもなおさず還相のすがたと拝される。故佐藤春夫先生が、上人の生涯を麗筆をもって綴られ、書名を『極楽から来た』とされたのも、「もと極楽に在りし身」と告げられた上人のお言葉によられたのであろうか。

「六神通」は、仏教では禅定を修することなどによって得られる無礙自在な不思議なはたらきをいい、これに六種をあげる。どの世界へでも思いどおりに飛行できる神足通、世間の遠近粗細などすべて見通す天眼通、世間のあらゆる声を聞き得る天耳通、他人が心の中に思っていることを悉く知り得る他心通、それにほんのうをすべて断じて、ふたたび迷いの世界に生れないことを悟る漏尽通を加えて、六神通という。五通仙人などという言葉もあって、前の五神通は諸天や仙人も得られるが、漏尽通は仏教の聖者のみ得られる不思議力とされる。阿弥陀さまの本願には、浄土に往生するものがみな六神通を得るよう誓われている。すなわち四十八願の中、第五願から第十願までがその本願である。教化自在な不思議力がその身にそなわるのも、すべて仏のお力によるのである。往生の素懷を遂げたという言葉もしばしば使われるが、浄土に往生してそれで終るのではない。神通自在の身となって、自らの悲願として十方世界にめぐり入って、苦悩の衆生を救

おうという広大な願いをこめているのである。

このような還相のねがいは、遠く印度の天親菩薩や北魏の曇鸞大師のご精神を承けたものである。

天親菩薩の作られた『往生論』これを祖述された曇鸞大師の『往生論註』には、浄土の行として作願、觀察などの五念門が説かれ、これらの功德善根をもって自分だけの安樂を求めるのでなく、一切衆生に施与してともども浄土に願生することを教えている。『往生礼讃』の讃歌も一韵ごとに「願わくは諸の衆生と共に安樂國に往生せん」と一律に結ばれている。この願文の還相の願いでは、その心を往生後に拡充されている。「十方界にかえりて苦の衆生を救摂せん」と広大無辺な志願をおこし、ひろく六道の苦界に入って摂化を及ぼすのを理想とする。しかもまっ先に人間の現境にかえり来って苦悩する人びとを救わねばならない。大師はまた『法事讃』に「誓って弥陀の安養界に到り、穢國にかえり来って人夫を度せん」と歌っておられる。「虚空法界も尽きんや、わが願もまたかくの如くならん」と云ってあるのは、この広大なねがいは尽き果てることなき虚空法界と同様に、永遠に尽きることがないであらうとの表白である。

以上のように往相還相の二つの広大な願をおこしおわって、ひたすら阿弥陀さまに帰依をささげて願文を結んでいる。

発願と平生念仏

この発願文には臨終の正念往生をねがい、また還来摂化の悲願をこめて、浄土の信仰が永遠の道であることを示されている。大師のおしえは、人間の世界が無常のはかない存在であり、また罪業の深さを自覚する上に立っており、したがって往相のねがいを第一とする。この教えを伝えた日本の浄土門では、凡夫の宗教をその建前とするので、往相の願いを先とすることは言うまでもなく、ひたすらこれに全霊をかけて念仏することをおしえる。還相の心は分に應じておこすべきものとし、浅深のちがいなど区々であっても、み仏の大悲心に導かれて、おのずから還相の心へ深まって行くことである。

臨終の正念をねがうことは多くの先徳がなされたことである。臨終の心はよく一切の業を導くといわれるし、また命終時には種々の悪縁や障りがあつて正念を妨げることが多いとされたからである。大師にあつてもそうした慎しみがうかがわれる。

浄土宗の勤行式では在家者のも同様、この発願文に次いで「光明偏照十方世界念仏衆生攝取不捨」の文を唱えて、念仏一会を修する次第になっている。信仰生活においては平生も

臨終も一つ、我われには現在の瞬間が移り行く事実しか経験することができない。平生の念仏こそ最要なのである。浄土教とても宗教の世界をただ来世にのみありとするのではない。念仏者は日常み仏の光明に摂化せられ、死生ともにわずらいなく、剛健なる浄土信仰において、日常に還帰される意義はまた甚だ重要であることが知られよう。

六時礼讃無常偈〈中〉

佐藤成順

(大正大学講師)

中夜礼讃無常偈

諸人ともに聴きたまえ、

中夜の無常の偈を説かん。

腐りて臭きしかばねを

それとも知らで 自らに

抱きて臥することなかれ、

不浄を仮りに人と言う、

重き病を得たる身に、

さらに毒矢の入るごとし、

苦しき多く集まれば

などか安らに眠るべき。(大木惇夫訳)

「今日の法要のなかで、あのふしのついたお経が一番壮厳だった」という感想をよく耳にします。「あのふしのついたお経」とは、ほかでもなく『六時礼讃(往生礼讃)』からとった初夜礼讃や三尊礼のことです。

善導大師が『六時礼讃』を作り、浄土の教えを宣布していた時代は、唐の国力が豊かになり、主都長安を中心に高度な文化が華開いた時代です。浄土教もそうした文化に支えられて教義の面でも、芸術的な面でも、非常に発達したし、宗教儀礼も整備されてきました。『六時礼讃』の文章が芸術的に

秀れ人の心を引きつけるのは高度な長安文化のなかから生まれたためでしょう。

詩をよくすることは、中国の知識人の一つの条件でしたが、とくに、善導は詩的な才能に恵まれています。詩的な才能を生かして、阿弥陀仏への熱烈な帰依の心情を、美しい浄土讃美の詩にみごとに表現したのです。

『六時礼讃』を読んでいくと、浄土の美しいありさま、阿弥陀仏の限らない智慧と慈悲の描写を繰り返して、人の心を浄土に誘っていきます。浄土のすばらしさ美しさに耽っていると、突然、偈文の内容が一転して、愕然とするような、みにくい人間の現実、罪深い自分を凝視し罪惡を告白反省する懺悔文に出会います。

浄土の幻想に耽けていた人が、懺悔文に出会い、はっとわれにかえり、浄土の清浄さにくらべ、罪深い現実の自分の姿に気づき反省していると、その反省の心をだめおすかのよう、さらに続いて、ここに解説する無常偈が歌われているのです。

このような、浄土讃美・懺悔文・無常偈という『六時礼讃』の三段の構成と転開を念頭において無常偈を読まないとこの偈文が歌われた意味を把握することができません。この三段の構成と転開は、三界に身のおき場のない、ゆく場所のな

い愚かな人間、それが救われるには弥陀の力にすがるといふ、浄土しかない、そういう善導大師の信仰感情の発露でしょう。善導大師の浄土教は、人間が生まれながらに持っている罪惡に対する深い洞察と反省に基づいているのです。

「腐りて臭きしかばねを、それとも知らで自らに、抱きて臥することなかれ」。人が自分の肉体に執着するのは自然なことです。それだけに、自分が、他人が、死んだ後に、その肉体が腐敗し臭気を放つのはなんともいえない嫌惡感をもよおします。これはにおいやきたなさなど単なる物理的な原因だけではないでしょう。その証拠には、動物の死体を見たときよりも、人間の死体を見たときの方がずっといやな感じがします。それは、自分と同じ生きものだからで、わが身にひきあてる気持がどこかに潜んでいるからではないでしょうか。

さきごろ、前漢時代の貴人の墳墓が中国で発掘されました。二千年以上も経過した遺体が腐敗もせずほとんどそのままの状態であったことには驚きました。おそらく、近親者が、死者が腐り臭気を放つのをきらい、当時の知恵と技術の限りをつくして、遺体が変わらないようにとの願いをこめて埋葬したものと思われます。こういう例はよほど財力のある人だったから可能だったのでしょうか。一般の人ではそうはいきません。

仏教では、人が肉体に執着する心情を逆に利用して、肉体が老化し、死体となり、腐敗し、臭気を放ってゆく次第を凝視し、そのきたなさをさと、肉体への執着から離れることを教える思想があります。善導大師は、きたない身へのとらわれを離れて、浄土に永遠の生命を求めることをこの偈文で教えているのです。

後夜礼讃無常偈

諸人ともに聴きたまえ、

後夜なる無常の偈を説かん。

時はうつりて 流転して

たちまち後夜に至るなり、

無常なること念念に

死の魔王をぞ伴える

道を行ずる者に告ぐ、

勤め修めて悟れかし。(大木惇夫訳)

「時はうつりて 流転して」。一日中仕事においまくられてみると、時のたつことの早さを痛感します。すべてにテンポ



の早い現代社会のなかで、一日の短さはだれしも切実に感じますが、大方の人はただそれだけの実感で終ってしまいま
す。時のうつりかわりにふりまわされ、おいまぐられてい
るうちに年老い、社会の一線をしりぞき、やがて近親者から野
辺の送りを受けるでしょう。特別の才能と思想を持った人だ
けが、その段階からぬきん出て、時がうつるといふあたりま
えの法則を、宗教に、哲学に止揚し、詩の世界に昇華したの
です。同じように時のうつりを意識しても、そこが、天才と
並の人の、ものごとに対する洞察力に違いがあるところです。
あたりまえの自然の法則の発見、そこから色々な道が生まれ
てくるのです。もつとも自然の法則を発見しただけでは宗教
にはならないでしょう。それを克服する道が必要なのです。

釈尊は、時も、人も、ものも、すべてが無常である道理に
気づき、その無常の苦しみを
克服する方法を苦心の末に考
え出されたのです。仏教は時
代とともに複雑化し、多様化
し、宗派に分かれました。け
れども、人生の悲哀、苦しみ
の原因は、無常からくるとい
う考えかたは仏教のもつとも

基本的なものです。

終南山の静寂な自然のなかに、目をさまし、まず、念仏の
声、礼讃の音調から善導大師の一日が始まる。一日をみずか
らの修行に励み、おりをみては市中の光明寺に出むいて、老
若男女に浄土の教えを説き、相談相手になっていた大師にと
って、一日一日が充実し、それだけに短かったに違いありま
せん。すがすがしい曙光のなかで、いましがた晨朝のお勤め
をすませたばかりなのに、もうあたりはすっかり暗に包まれ
夜もふけてしまった。

「時はうつりて、流転して、たちまち後夜に至るなり」。
時のうつりの早さを後夜の偈文に歌ったのは、今日の一日が
終ろうとするときに、しみじみ時の無常も味わった善導大師
の心情からではないでしょうか。だからといってなぜやりな
気分になってはいけない。

「道を行ずるものに告ぐ、勤め修めて悟れかし」。無常偈
の終りは、このように、はっきりと、無常の苦しみをのりこ
えてゆこうとする強い警告の言葉で結ばれています。宇宙の
生命からみれば短い一生なのだから、仏道に志すものは、せ
めて、生きている間に、ひとときひとときを大切にし、修行
に励み自分の道を究めるべきである、と教えているのです。



かの秋の日の丘

平井隆一

(東京都文京区春日在住)

明治時代の代表的な文学者の一人、国木田独歩の作品の「詩想」という中に、「路傍の梅」というのがあります。文庫本にして一ページにも満たない小篇で、この「詩想」には同様の作品が四篇組まれております。御承知の方もあらうかと思われませんが、その筋を一応御紹介しますと次のようです。

少女が友の宅でたべた梅の実を持ち帰り、我家の垣根に埋めおく。少女は「旅人が立寄る小さき茶屋の娘」で、時はうつりその家は倒れ、梅の老木のみ花が咲き美味い実を結んで、道ゆく旅客の渴きをうるほしている。

「されど誰ありて、此梅を此処にまきし少女の此世に有

りしや否やを知らず」というのです。全文を紹介してもそれほど紙面をとらないほど短篇ですが、ここには限りない物語が含まれているように思われてなりません。ところでわたくしはこの作品に最初にふれたのは、たしか十六、七才の頃であつたと記憶しております。そのときの感想の第一は、やはり限らない物語のそれぞれを思いめぐらすところにあつたように思われます。少女と「友が宅」のかかわりあい、旅人と茶屋の日常、少女の生いたち、その家が倒れるにいたるまでのもろもろのでき事、「草深き野」と変りはてたそのあたり、そこを立ちさつてどこともなく行つてしまつた少女の一家、その少女を

ふくめた家族それぞれがあゆむ人生。

この作品の発表は明治三十一年ですから、その時代をふまえるならば、明治・大正・昭和の激動の時代に転換するある家族の物語を思ひえがくことも可能かと思われまします。文学的にいえば、国木田独歩は自然と人事の交錯する文学世界を形づくったといわれております。したがって「運命」——という作品の発表もあります——的なもののとのかかわりあいからぬ世界でもあるかもしれない。この作品もその微妙な接点への観照の心情を、簡潔に表わしているようです。

最近十数年ぶりにわたくしはこの作品を読みかえし、同じような感想をいだいたのですが、ただわずかながら同時にまた決定的な相違のある読後感であることに気づきました。それは単純にいつてしまえばわたくしの成長そのものなのでしょうが、どうもこの言い方はあまりにも茫洋としすぎています。しかもその相違、すなわち成長がわたくしにとって、あるいは人間にとっていいことであるのかないのか、そのことは今のわたくし自身にも見当のつきかねることなのです。

その少女の生涯はいかばかりでありましたでしょう。友だちの宅でいただいた梅の実をとて美味しかっ

たといって、持ち帰る素直な心根をもった少女です。から、できることなら幸福な一生と願うのは一般的読者にとって正直なところでしょう。しかし「年経て其家倒れ」とありますから、さぞやさまざまな悲しいでき事もあったにちがいありません。その後その地を去った少女の生涯がどんなものであるにせよ決して平坦なものではないことは、想像にかたくないでしょう。

しかしよく考えてみますとき、風波のたたない人生ということはいったいあるものでしょうか。人の歴史がはじまって以来、さまざまなでき事が語りつくせぬほどあったろうと思います。この作品は一つの小説ではありませんが、わたくしは日本国民衆社会においては、それほど奇異なことではない人生の一コマとして、ひとびとの口のぼる事実であつたかと思われまします。とくに明治・大正・昭和の時代は社会の大きくゆれ動く時期でありましたでしょう。このとき、この物語の少女のような境遇のひとびとは決してなかったとはいきれないのです。これもまた歴史の一コマとしてうけとらざるを得ないものです。

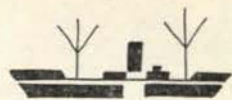
戦後わたくしたちは平和思想、幸福思想ともいうべき、ある意味では事なかれ主義のようなものが日常の世

界にもちこまれ、かえって精神的貧困と云々されるような近年です。勿論、平和を願わない幸福を求めないひとはないでしょう。しかしそれは願う求めるといふ渴望だけでは実現されない。実現されないのに渴望する気持は残っている。また表面的にたとえば物質的な面にのみ満足感を与えて人格全体の充足感を得たと錯覚する。だから日常のつまらないことに拘泥し、悩むということになったりするのではないのでしょうか。さまざまな憂え事のある人生を現実としてとらえる。少女のそれを一つの民衆の事実として認識する。諸行は無常といわれる如く、あすをも知れぬ一生を力いっぱい生きつづけることこそ日々向上の原動力ではないでしょうか。少女のその生涯をこれもまた生涯として把握したとき、わたくしは己自身の大きく変っているのに気づきました。

「詩想」の四篇の作品のうち、「丘の白雲」というのがあります。童が丘にのぼり空に漂う白雲を眺め寝むっしまい夢をみる。その夢は非常に叙情的であるが、「此後、童も憂き事しげき世の人となりつ、様々のこと彼を悩ましける。そのおりおり憶ひ起して涙催ふすは彼の丘の白雲、かの秋の日の丘なりき。」と結ばれている。つまり「憂き事しげき世の人」となっていくことは、一つ

の決してのがれることのできない現実として、己自身をオーバーラップするとき、良きにつけ悪しきにつけ、十六、七才の時分とは決定的にかわっている己を見出さずにはおれないのです。物質的なものにせよ、精神的なものにせよ、それぞれは孤立して云々できるものではないであります。一生をかけて全人格的な充足感を得ることがどのようなものか、それは決して結論をいそぐことのできないものであります。コンピュータにデータを入れればすぐに答の出でくる類のものではないことは、どのような時代になっても、人間の「憂き事」がたえないことからうなずけることかと思えます。

結局、「彼の丘の白雲、かの秋の日の丘」をしつと心のおくに眺め、「憂き事しげき世」に御していくのはひとたる本来的なつとめであると、自覚しなければいけません。たつとも幸福なるものは己のものとはならないのではないのでしょうか。いわば独歩的なことばでいえば「運命」、あるいは己自身でいきっているのではない世のさまざまな中に「生かされている」という謙虚な認識こそ、本当の未来を約束してくれるものに他ならないのではないのでしょうか。



ハイという返事を

山 本 竜 二

(神奈川県藤沢市藤沢在住)

ひとむかし前にくらべると、この頃の夏は、随分涼しくなつたといわれています。

機械文明が急激に進歩したために、冷房の歴史も、むかしの扇、団扇の手動期から、扇風機の初期の機械化期、そして、現代のクーラーの時代へと、めまぐるしく進んで、ひと頃の暑い夏は、克服されようとしています。

ところが、一方、地球そのものが、次第に冷えてゆき、あと二十万年も経つと、再び氷河期が訪れて、人類は滅亡するであろうと予言する科学者もいます。

このように、人間の生きている環境そのものが、だんだんと冷却化してゆく一方、人間の心もまた、知らず知らずのうちに、霊化ならぬ冷化をしているようです。

冷やかな、氷りついたような行動が社会全体に氾濫している今日、ささやかな善意を示すために、どれほど熱い勇気を必要としなければならぬ時代となったことでしょう。

この冷えた心を温めてゆく手だてを、私たちは、本気になつて考えなければならぬのではないのでしょうか。

私は、先日都内のあるデパートの立喰いコーナーでこんな情景を目に見、耳にしました。

威勢のいい、若い店員が、手際よく客の注文を、次から次へとさばいてゆきます。

そのうち、私のとなり、大学生と見うけられる三人の青年が立ち寄りました。三人は注文の品が届く間も、忙がしく

雑談にふけています。

その時、出来あがった品を手にした店員の、

「野菜きしめんの人！」

という声が店のなか一杯に響きました。

「ハ―イ！」

と、くだんの青年のなかの一人が、その声に応じました。すると、その青年の連れの一人が彼にいうのです。

「お前、ハ―イていうの癖だな。」

その言葉を受けて、かの男もまた答えています。

「うん、人に呼ばれると、すぐ、ハ―イって出ちゃうんだよ。癖かな」

この奇妙な会話を、二人の青年は、別に冗談でしているわけではなく、極自然にやっているのです。

ハイという返事、それを癖という言葉で表現するのはふさわしくないとしても、習慣といえは習慣のようなものでしょう。

ただ、ハイという言葉の美しさが、若い人たちに分らなくなって、癖だとか習慣的なものと受けとられるようになっていくことに、さびしさを感じざるをえないのです。

ハイという返事で人柄がわかるといわれます。それはま

た、ハイという返事で、その育った環境、すなわち家庭とか、少し大げさにいえば、人生がわかると言いかえてもよいでしょう。

ハイは、相手の仏心を敬う心から発する応答であるといわれます。そして、打てば響くように煥発をいれずはねかえってくるところに、ハイの美しさと尊さがあります。

昔、禪宗のお坊さんはハイは端的な自己表現であるといいました。

ところで、親が子供に、「呼ばれたらハイと返事をしなさい」とさかんに、教えても、なかなか答えなくなりました。ハイと素直に返事がでないで、自分のおかれた情況ばかり説明し、いろいろ口答えをするのです。その理由が妙に理屈ばくて困ります。

親と子の関係というものは、確かに平等であるかも知れませんが、対等ではないはずです。親子にかぎらず、なべて、対等意識の強い人には、ハイは出ないといわれます。

そして、このハイが自然に出るには、育った家庭というものの影響力が大きいように思われます。家庭にハイと返事ができるような雰囲気をつくりそのなかで子供達が育つようにすることが大切なのではないでしょうか。



異僧眞覺

第九回

柴田 六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

後に天明の大火と称せられた京では未曾有の火事である。公家・武家六十五家、神社二百二十余社、寺院九百二十八、塔七、被害町数三千百余町、家数およそ十八万三千、土蔵八千百余を焼きつくし、禁裡、二条城もともに炎上した。

読経念仏する眞覺の脳裏には、昨日御所の築地の蔭にへたり込んだまま動こうとしなかった老人の顔が、今朝東山から帰る途すがら、あちこちに横たわっていた骸の姿が次々と浮んだ。

「和尚さん、和尚さん！ それに眞覺さんも！ あんたらはお経をあげることしか知らんで叶わんのう。早よ跡かたづけや……いや。まあ、斯んな時でもお経あげるところが坊さんの偉いところかも知れんが、随分焼け死んだ

と云うことやで」

威勢のよい声に振り向くと、鷹ヶ峰あたりの百姓の檀徒である。その人数は次第に増えて昼頃には十名近くになった。人々は未だ残る煙に水をかけたり、鳶口で焼けぼっくりを引っかけ、境内の隅に積みあげたり甲斐々しく立ち働いた。眞覺も左の掌を手拭で包んで手伝ったが、一面の水ぶくれはヒリヒリと痛んだ。妙信は檀家の者が気をきかせて持参してくれた米を炊いたりして打ちのめされた様子もなかった。焼跡の整理と飯堂の建築の為に慌しく日が流れた。北野天神の側に借りていた檀家の離屋を引き払ったのは秋のかりである。

飯堂にもせよ寺で起居するとなると三人は、あの地獄さながらの火事の日が生々しく想い出されて容易に寝つ

かれなかった。殊に妙信はひどく欄を嵩ぶらせている様子であったが、そのうちにひどい咳をするようになり、もともと瘦せぎすの肩が急に落ちて来るのが真覚の眼にもありありと映った。心配した和尚の連れて来た医者、道庵は癆咳と診断した。火事の日以来の不自由な生活と無理が祟ったのであろう。「郷里の三河へ帰る」と言う妙信に、和尚は大蓮寺再建の為には未だ乏しい財布から何がしかの金子を包んで勞った。三条大橋まで同道した真覚を時折り見返りつつ、力無げに歩みを運ぶ妙信の後ろ姿を眼で追いつながら、

「ああ。もう此の世の人では無い」

と、彼は胸の中でつぶやいた。加茂の河原から吹きあげる師走の風が彼のその胸の中を冷たく吹き抜けて行った。

その昔皇女の某が此の寺に安産の祈願をこめたという因縁を頼って奔走した和尚が、焼け残った御所の建物の一部を貰いうけて来て書院にし、本堂も漸く再建されて、どうにか寺の格好が整った。まことに目まぐるしい二年の歳月であった。

妙信の郷里三河は古来浄土信仰の厚い土地柄である。徳川家康も「南無阿弥陀仏」「南無阿弥陀仏」と弥陀

の名号を何百何千と書き連ねて自他の魂の救済を祈念した。その書幅は今なお諸家に秘藏されている。

さて癆咳に斃れた妙信は再び起つことが出来なかったが、妹のはるも又姉に習って出家を望んだ。十八才のはるが、同じ三河出身の寺町二条俊晃院の住持田宮覚仙に連れられて大蓮寺の門をくぐつたのは、寛政二年の春の彼岸前である。

真覚は一見して彼女の美しさに魅せられてしまった。形よく孤を描いた眉。豊かな頬を引きしめる心もち受け口の小さな唇。それに、何よりも心ひかれたのは、疑いということを知らぬげな涼しい眼元。その眼はくるくると利発そうに動いたが、やや長く濃い睫がその表情に一抹の憂いを刷いている。その睫がハッと開いて視線が合うと、彼の軀はわなわなと震えた。震えながら彼は、今日から起居を共にする飲みに思わず心が弾んだ。その心の弾みははるの美しさもさることながら、既に二十五才になった真覚に漸く青春の血がたぎり始めていたせいでもあった。

今日が彼岸の入りと云う日、本堂ではるの剃度式が行なわれた。式といっても、真覚が経を誦している間に、和尚の手で髪が剃られ、三帰戒を授け、僧名が与えられ

るだけである。和尚は無表情で惜しげもなく黒い髪を落して行く。真覚は眼を瞑った。授戒を始めた和尚の聲に眼を開くと、髪は既に無残に失なわれていたが、そこには丸々と形のよい頭があった。何故か安堵にも似たものを彼は感じた。

妙春と名付けたはるの僧としての指導のすべてを和尚は真覚に委せた。夜になると彼はかつてその姉とそうしたように、文机を挟んで妙春と向い合った。頭を丸めた妙春の、髪ある時とは趣を異にして美しさが彼を圧倒した。彼は机の下でグツと膝頭を抑えながら、「わしはあ



んなのお姉さんに色々教えて貰うて一人前になった。今度は御恩返しのもりで、わしの覚えたところはみんなあなたに教える」

紋切り口調で彼は言ったが、妙春は既に姉から真覚について何も彼も聞いているらしく、親しみを込めた笑顔で「お願いします」と頭をさげた。

和尚は未だ充分整わぬ本堂の荘厳（かざり）の募財に忙しく、毎日縁故者を訪ねて不在勝ちであった。真覚は妙春のお経の稽古が終ると、久しく忘れたようになっていた絵筆をもち出した。彼が好んで画くのは伏見稲荷の辺りで売る伏見人形である。饅頭食い、潮汲み、子守り、福助、おかめ等の土偶は、彼の泥臭い筆致に相応しい材料であった。時には逢坂山の辺りで往き交いの庶民にひさぐ大津絵の奔放な図柄を真似たりもした。仏画もあったが、鬼の念仏や、盲人禪を犬に喰えられて慌てふためく絵が彼の得意であった。鬼の念仏を画きながら、

「これは俺の姿だ」

と言う真覚に、妙春が「なぜ？」と反問しても、彼は充分説明することは出来なかったが、次第に復興してゆく街の姿を見ながら彼は一つの疑問を抱いた。一面の焼け野原に先づ普請が起きたのは武士の邸宅である。次

戸川靈俊著

『若き日の軌跡』

B 六版 二二〇頁 予価八〇〇円

発行所

京都東山

初音書房

いで寺や宮が再建され、大きな商家も又早い方であつた。しかし多くの庶民は焼けただれた板切などを拾ひ集めて大小舎同然の、僅かに身を入れるばかりのものを作るのが精一杯である。それも出来ぬ者達は、お救い小舎と呼ばれる施飯所に群がり、辛うじて飢をしのぐと、寺の椽の下や、神社の拝殿、或いは橋下に一夜のねぐらを求めて蟬集した。そのうちに何時しか乞食の群に身を投じてしまったものもあると聞く。年ごろの子女は多く売りとばされ、或いは自ら身を泥沼に投じた。これこそ地獄でなくて何であらう。地獄は死んだ人間の行く処ではなく、此の世こそ地獄なのだ。一切衆生（あらゆる人々）の為に説かれたと云う仏法は果してこの人々を救うことが出来るのであらうか？若しそうだとすれば、寺の

再建など二の次三の次で、先づ家無き者に家を、飢えたる者に食を与えることこそ仏者の使命ではないのか？或る寺では和尚が淨財を集めては尽くこれを米に替え、唱名念仏してて施米していると聞く。これこそ真の僧と云えようか。大竜和尚は一体斯る氣持を持ち合せているのであるうか？疑問はそのまま和尚に対する不信の思いにつながって行きそうであつた。そして自らも経を誦し祈禱する以外何の能も無い純物であることに思い到ると彼は氣が狂いそうであつた。

「『鬼の念仏』はわしのことや」

と自嘲せずにはおれない。悶々として楽しまぬ彼の唯一の救い、いや逃げ場は、妙春と夜の一刻を語るひとときを語ることのみであつた。彼の絵が二人に話のきっかけを作ってくれた。

大学の庭に宗教を説き哲学を講じて二十有余年。東山沿いの哲学の小径を逍遙しながら若人に語りかけし青春と人生との珠玉の随想集

手	仏
び	教
き	の

<4>

日本仏教の宗派について

— 浄土真宗と禪宗 —

問 南無阿弥陀仏を唱えるということはどういう意味をもつのですか。

答 南無阿弥陀仏の南無とは、お経の文字であるサンスクリットのナモという言葉の音表の訳で、よりすぎる、帰依、帰命という意味です。阿弥陀仏とは、無量寿という意味で、仏のめぐみは無量であり、仏の寿命も極楽に住する人の寿命も、ともに無量であるということから、阿弥陀仏と名づけられたのであります。このように南無阿弥陀仏とは、「阿弥陀仏に帰命します」という意味です。

弥陀の本願は、四十八願といわれますが、その大部分は衆生救済のことを説いているもので、その方十八願に「まごころから仏を信じねがって、自分が極楽浄土に往生しようと思

って、たとえ十念であっても、お念仏するものはその願い通りに救おう。もし往生できないようなことがあるならば仏にはなるまい」といっておられるように、弥陀の無量の救いによって極楽往生するという念願の祈りが、浄土教のおしえの特徴ということができましよう。

問 門徒宗というのも、お念仏の宗派ですか。

答 門徒宗といえは、東西の両本願寺をおもいかべます。が、正式には、浄土真宗という宗派で、親鸞聖人を開祖と仰いでいます。親鸞聖人は、浄土宗の開祖、法然上人に師事した一人の門弟ですが、「よき人（法然）の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細がない」といっているように、法然上

人に絶対の帰依をされた人です。「非僧非俗」といって家庭をもったまま教われてゆくことを強調したのです。そして親鸞聖人自らが実践し、人間としてきわめて自然の生活であり、人間本来のすがたにおいて念仏を申すべきことを説き、どんな境遇にあっても一心にお念仏をとなえることが、極楽浄土への道であるとおしえるのです。もちろんこのお念仏は、浄土宗と同じように「南無阿弥陀仏」ととなえ、阿弥陀仏の本願にすがって往生しようというのです。

問 禅宗という宗派についておしえてください。

答 禅のおこりは、中国では、一般に「だるまさん」といわれる、菩提達磨が初祖ですが、禅という言葉は、インド古代にあっても、静慮とか一心と訳され、心を一点に定めて散乱動搖を離れた状態をいうのです。

禅宗という宗派の名前は、禅を主とするところから起った名称で、禅宗では、他宗にみられるような教理がないのが特色であります。それにかわるものを行におくのです。行という場合の行は、ここではもちろん坐禅のことですが、掃除とか、食事の用意、作法など日常の生活がそのまま修業であるから、すべての事に全力をつくして行わなければならないの

です。

禅宗の場合、坐禅をすることによって自己の心の本性を見きわめ安心の生活を送るのが立前ですが、「教外別伝、不立文字」といって、經典などによらないということです。これは經典（文字）が不用という意味ではなく、文字にとらわれないという意味です。

問 坐禅の実践の方法にもちがいがありますか。

答 禅宗といっても、いろいろの派がありますが、坐禅の行法には、大きく三つに分けることができます。

それは、看話禅といわれる臨済宗、默照禅の曹洞宗、念仏禅の黄檗宗の三つであります。

看話禅とは公案工夫によって悟に進んでゆく方法で、「看」とは工夫すること、師から与えられた公案を工夫し、解決してゆく禅法です。また、默照禅というのは、ただ黙々と坐禅に精進するのをいうのです。念仏禅というのは、坐禅をしながら念仏を唱えることによって成仏を得ようというのです。臨済は榮西禅師により、曹洞宗は道元禅師と瑩山禅師によって、また黄檗は隠元禅師によってそれぞれが国に弘められたのであります。



四天王寺への道

高橋 良和

聖徳太子開創の大阪の名刹四天王寺は、庶民の寺であり、大阪とともに生きぬいてきた古刹でもある。

第二次大東亜戦争で戦災をうけた伽藍も、そのほとんどが復興し、鉄筋の新しい堂宇が新様式で庶民の心を結んでいる。

なんとしても大阪市民の寺である。

その四天王寺の前を地下鉄が開通して、駅名を決めるのに意見が出ていたようであったが、夕陽ヶ丘、四天王寺前と、四天王寺の名を加えたところなどは、なんとしても、四天王寺は大阪にあってなくてはならない寺である。

その四天王寺は法然上人の二十五霊場のなかの、第六番の札所である。

あみだ仏と心は西にうつせみの
もぬけはてたる声ぞすゞしき

というのがその霊場の御詠歌である。

ところがその霊場のある四天王寺に、霊場とつたえるところのお堂がないのである。戦前は念仏堂というお堂があったが、戦災で跡かたもなくなっているし、その上第六番札所の石柱もなくなっている。

浄土宗の方が、この四天王寺に参詣して、「法然と、霊蹟の念仏堂はどこですか」とたずねても、「さあどの辺だったでしょう」ということにもなりかねない。

そこでなんとか、この開宗八百年を機会に、この念仏堂の復興と、霊場としての札所の石柱を建てて欲しいとおねがいしている。

この念仏堂は、大日本仏法最初四天王寺という石柱を建つところを、石の鳥居をくぐって入った左側である。

そのお堂は跡かたもなくなっているが、昔は念仏堂と

も、引声堂とも称したようである。

その昔、聖徳太子が最初にここで念仏されたところであるから、法然上人もこの縁りの四天王寺に参詣の折には、このお堂で念仏したとつたえている。

それもさることながら、この二十五霊場となったわけは、四十八巻伝の第十六のところに、

僧都上人所造の「選撰集」を披覧して、この書のおもむき、いさゝか編輯なるところありけりとおもひて、寝られたる夜の夢に、天王寺の西門は、病者かずもしらずなやみふせるを、一人の聖（ひじり）の鉢にかゆをいれて、匙をもちて病人の口ごとにいるゝありけり、「誰人にかあらん」ととふにかたはらな人こたへて、「法然上人なり」というと見てさめぬ。

とあり、ここの僧都というのは、高野の学僧明遍僧都のことである。

また第十六の第三章に、上人天王寺におはしけるとき僧都善光寺参詣の事ありけるか云々

と記して、法然上人と、明遍僧都との問答のあったことを詳しくつづっている。この問答のあと、明遍僧都は、深く法然上人に帰依したということである。

このことと言ひ、おかゆの施食というのも、自分にとるに足らぬ凡夫であるが、それを法然上人の念仏のありがたさを知らしめてもらつて、漸く生死を越えることが出来たという、明遍僧都の心の遍歴をあらわしたものと想像出来る。

またこの施食のことを、浄土宗の社会福祉のはじまりであると、社会福祉に活動する人は解釈する向もある。

夢を素直に解釈すれば、そのような説が出て当然のことである。

明遍僧都ひとり、三論、法相、真言のおしえを学びながらも、なお出離の道を求め得なかつたことをあらわした表現としては、なかなか味のあることばであるといえる。

この念仏堂では、法然上人のあと、その弟子の法性寺空河が、ここで不断念仏を修したという記録もある。

この念仏堂は、久安年間（一一四五—一一五〇）に、鳥羽法皇が建立したとつたえられている。然し先にも述べたように、昭和二十年三月の空襲で、焼失してしまつた。なんとかして早くわたしたち浄土宗の手で復興したいと期待している。

四天王寺西門の向い側に、本宗の名刹一心寺がある。この寺は第七番であるから、百米ほど離れて、霊蹟が二つあるのも珍しい。最近では地下鉄とともに、門前の道路もすばらしく整備されて、西門のあたりが一だんと美しくなっている。

浄土宗列祖の

墨蹟をたずねて

③ くきやう寺

ちうち

④ ちよつきよにて

しやうしえの事

① 御ふみのやう

⑤ めてたく候

ひろう

かきいたしハ

申し候へは

② ちおん院まッ寺

⑥ 左小井 下ふさの国

にて候

いひぬまの

かしく

今回は檀林飯沼弘経寺に現存する南誓雪念上人の常紫衣の女房奉書を紹介してみたい。女房奉書は天皇側近の女官が、勅命をうけてかな書で書いて出した書状である。これは天皇の命をうけて漢文体で書かれた論旨と一対になるものである。女房奉書は写真を見ていただければわかるように非常に流麗なかな書であり、しかも書く順序に特殊な規則がある。

上に読み方と順序を付しておいたので参考にしていただきたい。この女房奉書の内容は、「知恩院の推薦状を天皇にお見せしたところ、下総国飯沼弘経寺の住持に常紫衣を勅許するとおっしゃれました。おめでとうございます。この旨を御連絡いたします。」というものである。この女房奉書だけではよくわからないがこの時一緒に出された漢文体の論旨と合せてみると具体的な事実がはっきりする。論旨によれば寛永十一年（一六三四）五月十九日、明正天皇から弘経寺住持南誓雪念が常紫衣の着用を許可されており、女房奉書もこの時のものであることがわかる。常紫衣とは寺の歴代住持に紫衣の着用を許可するものであり、住職個人に紫衣の着用を許可する一代紫衣よりも格が上である。関東の浄土宗寺院の中でも増上寺、光明寺、大光院・伝通院等数少ない。飯沼弘経寺の場合は千姫の仲介により常紫衣が許可になったのであろう。南誓雪念は後に増上寺二十世となる高僧である。弘経寺は戦国時代に多賀谷氏の寺乱にまきこまれ、飯沼と結城に分かれてしまったが、この女房奉書を見ると、南誓雪念の時代には飯沼弘経寺は完全に復興され、檀林寺院の中でも上位を占める寺になっていたことがわかる。女房奉書は室町時代から近世初期にかけて多く出された手紙であり、非常に興味深い史料である。

一南誉雪念常紫衣の女房奉書一



(飯沼弘経寺所藏)

「浄土」購読規定	一部 定価 百円 (送料十二円)	会費一カ年金一、二〇〇円 (送料 不要)	浄 土 九月号	昭和十年五月二日 第三種郵便物認可 昭和四十七年八月二十五日印刷 昭和四十七年九月一日 発行 定価 百円 編集人 宮林 昭彦 発行人 佐藤 密雄 印刷人 関 二三男 印刷所 三幸社印刷所	東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六 発行所 法然上人續仰会 電話東京二六二局五九四四番 〒一〇二 振替東京八二二八七番
-----------------	-----------------------------	---------------------------------	----------------	--	---

新企画でスタートした

『浄土宗新聞』

をご家族みんなで読みましょう

タブロイド版 8 頁 (毎月 1 回発行)

年 額 400 円 (送料共)

発行所 東京都港区芝公園4-7-4 浄土宗務支所内
浄土宗新聞編集室
TEL (03) 436-3351 振替東京 163497

“お彼岸の施本に好適”

『ひがん会』 秋季号

新書版表紙共 12 頁

価一部 15 円 (200部以上13円) 送料実費

発行所 東京都千代田区飯田橋 1-11-6 〒102
法然上人讃仰会
電話 (03) 262-5944 振替東京 82187

佐藤治子 著

新刊『旅 日 記』

アメリカ・シルクロード・インド篇

本誌で掲載した世界旅行の随篇を一冊の本にまとめてみました。
「平凡な主婦の平凡な世界旅行」として気軽にお読みいただければ幸いです

四六版 320 頁 単価 1,500 円 (〒140円)

発行所 山喜房仏書林

御用のむきは本会までお申込み下さい。